



馬頭観世音

数多い碑



大正10年に建立した馬頭観世音大菩薩

いまは廃屋となった山奥の一軒家近くには、墓標が立っていました。近寄って見ると「馬頭観世音」とやっと判断することができました。また、別の場所では愛馬を亡くし自分で刻んだのであろうか、小さな安山岩に「馬頭観世音」の石文が設置されていました。さらに、各地区にはそれぞれ石工が刻んだのであろう大きな馬頭さんの石碑が建っています。置戸にはこのように「馬頭観世音」「馬頭観世音菩薩」の碑が多くあります。

置戸開拓の歴史は馬の歴史でもあります。農耕に造材に馬は主役として活躍し、開拓の原動力でした。なので最も大事な馬が死ぬと、その霊を慰め、さらに代替馬の無病と安全を祈るといふ心のあらわれから、自分の手で馬頭さんをまつたのでした。

馬の寿命は平均20年ぐらいといわれていますが、冬山造材では短期間に無理して働かせることもあったので、作業現場で死ぬ馬もいました。特に上曳ひきでは急斜面で荷を支えきれず、足を折って廃馬となるものも少なくありませんでした。馬運の

悪い人など、一冬に三頭も廃馬とし、経済的に破綻をきたしたなどという話もありました。

もともと馬頭観音は人身馬頭の仏で、かつて置戸の弘法寺では本尊を馬頭観世音菩薩としていた経緯があるほどです。馬頭観音については、①人間の煩惱を、馬が草を食うように食ってしまうこと。②人間の煩惱を、馬が草を食うときその多いところから食うように、煩惱の多いところから食うこと。③馬が非常に早く草を食うように、仏は人間の煩惱を非常に早く消滅させること。と解説し、仏教本来の馬頭観音は馬の守り仏ではなく、人間を救う観音さまであるとする書もあります。

最も大きい馬頭さんは、日進（現・西町）のこじか保育園跡地付近にある馬頭観音であり、大正10年5月建立とあります。馬頭さんの前では毎年子ども相撲が行われるなど「馬頭さん祭り」が繰り広げられていましたが、戦後20年を経た頃には馬の数も少なくなり、祭り手は一部有志や元馬夫の手によって行われるだけとなりました。

（参照：置戸町史上巻）

第36回町民憲章推進大会

助け合いのネットワークづくりを

北見市の青山由美子さんが講演



置戸町自治連絡協議会など主催の第36回町民憲章推進大会が2月16日、中央公民館で開催されました。この日は「高齢になったからこそ、慣れた布団に慣れた枕、どこに行っても戻るとほっとするこの地域で暮らし続けるためには」と題して、北見市で認知症高齢者のグループホームやデイサービスを行っている有限会社エーデルワイス代表取締役の青山由美子さんを迎えて講演が行われました。青山さんは「要介護になっても主役は自分。閉じこもらず外出に挑戦する気持ちを今から抱いておこう」とし、高齢になっても社会に対してはオープンな姿勢を貫くことが大切と述べました。また「だれでも自分や家族が認知症になる可能性がある。住み慣れたところで最後まで暮らすために、町内会単位などによる地域の助け合いネットワークづくりを」と提唱していました。